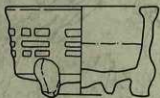


特別史跡

一乘谷朝倉氏遺跡

1994



福井県立一乘谷朝倉氏遺跡資料館



上 西山光照寺石仏群 下 第86・87次調査SF4418

特別史跡

一乘谷朝倉氏遺跡

1994

福井県立一乘谷朝倉氏遺跡資料館

序 文

朝倉氏遺跡の発掘調査・環境整備も町並立体復原事業が完成し、新しい局面を迎えることになりましたが、ここでは平成6年度に発掘調査した下城戸と、西山光照寺跡について報告することになりました。

下城戸は昭和54年度と61年度にも発掘調査を実施しており、その構造などは把握されていましたが、今回は当時未買収地であった土塁と山裾の間の道路、石垣などを調査しました。もともと生活の場ではないので出土遺物はわずかしかなかったようです。

西山光照寺は天台宗の寺院で、参道には等身大の石仏が多数並んでいます。本堂などの主要建物があつたと思われる平坦地のうち南東側を調査しました。全体的に削平されていて建物の構成などを確かむことは出来ませんでした。発掘地区のほぼ中央に地下倉庫と考えられる4m×3.5m深さ1.5mの長方形の石組遺構が発見されています。

ここからは青磁を中心に多数の遺物が見つかりました。中には直径20センチをこす香炉や林檎型の水注、瑠璃釉の碗など優品も出てきています。また茶臼や葉茶壺などもみられ、茶の湯が盛んだつたこともうかがえます。

今後遺跡の発掘調査が進むにつれて、一乗谷の更に多様な面が明らかになることを期待したいと思います。

最後になりましたが、事業の実施にあたって文化庁をはじめ関係各位の皆様、地元の方々には大変お世話になりました。心から厚くお礼申し上げます。

平成7年3月

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

館長 貴志 真人

例 言

1. 本書は、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館が平成6年度に実施した国庫補助事業の発掘調査の概要報告である。
2. 平成6年度は発掘調査中期10カ年計画の8年目にあたる。本書には、第85次調査、第86・87次調査の概要を収録した。
3. 遺構平面図作成にあたっては、国土座表系第VI系をもとに、朝倉氏遺跡内に設置した基準点を用いた。
4. 本書の作成にあたっては、館長貴志真人の指導の下に館員全員が討議・検討を行い、執筆は調査担当者がそれぞれ分担し、文末に文責を記した。なお編集は岩田隆が担当した。

目 次

巻首図版

序文

例言

目次

I	平成6年度 調査概要	1
II	第85次調査	3
III	第86・87次調査	7
	遺構	7
	遺物	12

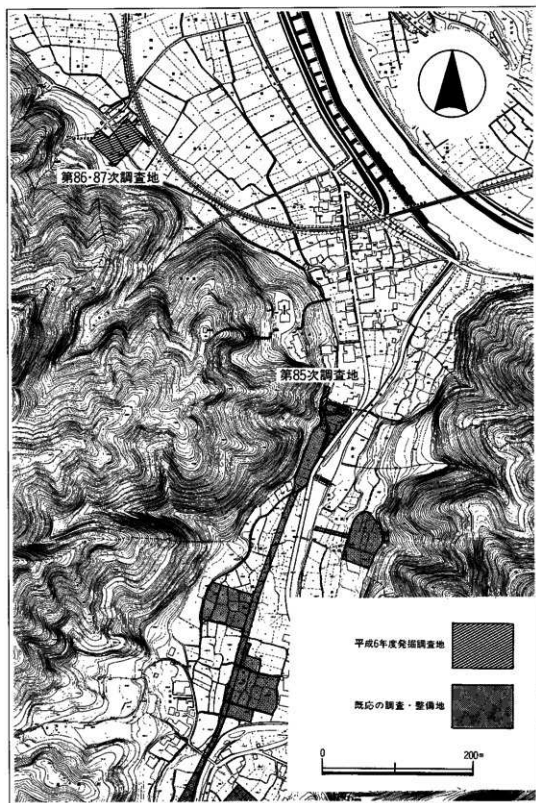
I. 平成6年度の調査概要

本年度は、「発掘調査・環境整備事業中期10カ年計画」の第8年次として、福井市城戸ノ内町下城戸地係の約400㎡（85次調査）、および福井市安波賀中島町西山光照寺地係の約24,000㎡（86・87次調査）について発掘調査を実施した。下城戸の調査は戦国城下町一乗谷の入口の整備を前提としたもので、86・87次調査は、石仏で知られる西山光照寺の整備を計画している。第85次調査の調査期間は4月1日～5月18日まで、第86・87次調査は5月19日～12月25日までである。11月14日にはヘリコプターによる航空写真測量を実施した。この間、11月17日から28日までは、本調査と平行して県道鯖江・美山線改良工事に伴う緊急調査（第88次調査）、12月8日～20日は一乗谷川河川改修工事に伴う事前調査（第89次調査）を実施した。

第85次調査は、通路の中央を後世の農業用水が流れていたため大きく抉られていたが、土塁の石垣の基礎部は巨石が並んでおり、城下町の入り口としての威容を窺い知ることができた。第86・87次調査は、後世の削平が著しく、必ずしも遺構の残りは良好ではなかったが、上段には砂利で基礎工事をした礎石群があり、礎石建物の裏には墓地があった。また礎石建物の前面には深く規模の大きい地下倉庫があり、ここから中国製陶磁器を中心に多数の遺物が出土した。

また、県道鯖江美山線改良工事に伴う緊急調査（88次調査）は、昨年に引き続き特別史跡指定地区外の福井市東新町の調査で、園場整備のため遺構の残り方は部分的であったが、石組溝便所などが確認された。一乗谷川改修に伴う発掘調査（89次）は、上城戸のすぐ下の地点で、戦国時代の護岸石垣を確認して、今後の河川改修の石垣積み基礎資料とすることを主眼としたが、その石垣は見つからなかった。

調査次数	調査箇所	調査期間	面積	調査理由
85次	城戸ノ内町字下城戸	4月1日～5月18日	400㎡	計画調査
86・87次	安波賀中島町字西山光照寺	5月19日～8月13日	2,400㎡	計画調査
88次	東新町	11月17日～11月28日	500㎡	県道鯖江美山線改良工事に伴う事前調査 受託事業
89次	城戸ノ内町字上城戸	12月8日～12月20日	100㎡	一乗谷川河川改修工事に伴う事前調査 受託事業
環境整備箇所		期間	整備事業	
城戸ノ内町字川合殿、平井		4月1日～7年3月31日	「史跡等活用特別事業」による「町並立体復原事業」	
保存処理		4月1日～7年3月31日	「鉄製品400、銅製品300、木製品400」	



第1図 調査地区位置図

II. 第85次調査

下城戸城については、昭和54年度（第35次調査）に渚の部分について、昭和61年度（第56次調査）に城戸ノ内側約1,200㎡について発掘調査を行っている。今回はその時未買収地であった城戸の通路にあたる部分について発掘調査を実施した。これまでの調査でその構造はほぼ把握されていたが、一乗谷の入り口であり、巨石を用いた門跡を整備するために今回の調査を計画した。調査面積は約400㎡で、期間は4月1日から5月18日まで、約1カ月半を要した。

遺 構 (PL1, 第3・4図)

下城戸は一乗谷の入り口の最も狭くなった所に堀と土塁を築いて城戸ノ内を防御したもので、西の山裾から突き出た土塁と中央の土塁、その前面の渚から構成されている。

今回発掘調査を行った部分は、中央の土塁と山裾の挟まれた部分で土塁と山裾の間は約6mある。ここは以前幅2.5mほどの農業用水が流れていたもので、道路の部分はかなり削り取られていた。

SV4401 土塁SA3380の西の石垣で、長さは18mある。しかし、上に積んであった石が崩れ落ちて、下の基礎となる石だけが8石残っていた。残っている石も前に傾いたり、上に積んであった石の重みで割れている。これらはいずれも巨石で、最も大きい石は長さ4.3m、高さ1.4mある。ただ崩落した2段目の石や、傾いた石から推定すると厚さはあまり厚くなく0.6m程である。道路面からの土塁の高さは3.5mほどなので、2石から3石上に



第2図 下城戸地区地形図

積み上げてあったと考えられる。ただ、道路には崩落したと考えられる石は2・3石を除いて割合小さく大きい石でも縦1m×横1m厚さ50cm程しかない。また数も10石ほどしかなく、あとは後世に用材として運び出されたらしい。

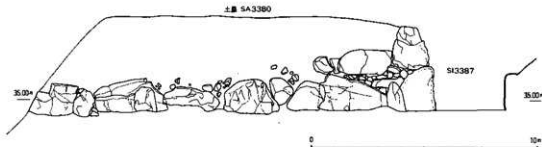
石垣の積み方については、基本的には自然石をそのまま積み上げる方法であるが、一部上に積んだ石の安定を良くするために、石の上面を鑿って削って水平にした跡がみられる石がある。また、石垣の基礎構造については、石垣が前に傾いていたので、十分調査することはできなかったが、根石で固めたり、地盤を突き固めたりしてような跡はみられず、道路面より20cm～30cmほど掘り込んで巨石を据えていただけであった。

なお、石垣に使用されている石は安山岩系の石で、すぐ西側の山に産する。

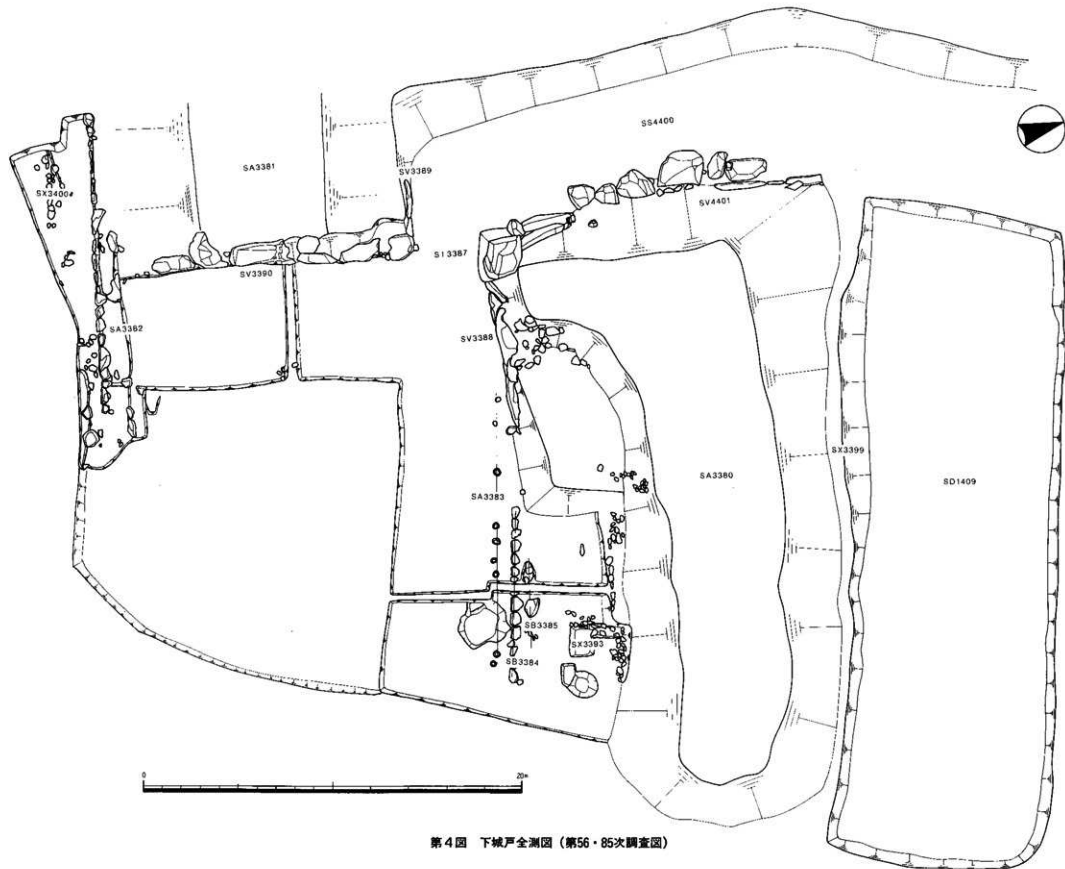
SS4400 土塁SA3380と山に挟まれた幅6m程の道路である。しかし、山裾が側は後世に農業用水路となっていたので、残存していた幅は、3.5m程である。また、道路面についても城戸内の道路で確認されたような小砂利を敷き詰めて固めたしっかりした道路面は見つからなかった。一部で地山の岩盤がでてきたのと石垣SZ4400の基底面のレベルが一致したので、この面をもって道路面とした。この面は杉の根などでかなり攪乱されていたが、砂利敷の道路面がそのために見つからないような状態ではなく、もともと砂利敷ではなかったと考えられる。

SD1409 下城戸の外濠で、第56次調査で確認している。幅は8mある。(深さについては底まで調査していない。) 今回の調査では、山裾まで濠があって道路SS4401が濠がかかる橋になっていたか、それとも土橋になっていたかを調査した。山側から2カ所幅1m、深さ1.5mのトレンチをいれた。その結果、濠に堆積したへドロ状の青灰色土は、ちょうど道路の部分までで、道路の下は山側が地山で東寄り是一部砂利の堆積層となっていることを確認した。したがって、道路は土橋だったことが判明した。

出土遺物については、発掘した場所がもともと生活の場ではないことと、後世の農業用水路で大きく攪乱されていたので、越前焼の甕や播鉢の破片が10数片出土しただけであった。(岩田 隆)



第3図 土塁SA3380、石垣SV4401立面図



第4図 下城戸全測図 (第56・85次調査図)

III. 第86・87次調査

本調査は、福井市安波賀中島町字光照寺地係の約2,300㎡を対象としたものである。調査地は、小字名に伝えられているように、西山光照寺の故地である。

調査は平成6年5月19日に開始し、8月10日に86次調査をほぼ終え、引き続き87次調査に移った。11月14日にヘリコプターによる航空写真測量を行い、遺構平面図を作成した。西山光照寺は、天台宗の寺院で参道に石仏が並んでいることで知られている。寺伝によれば、その創建年代は平安時代に遡るとのことであるが、朝倉氏との関係が深くなったのは、初代朝倉孝景が、伯父の鳥羽将景の菩提を弔うために天台宗の高僧盛舜上人を招いて再興したことによる。その後上人の指導によって、石仏・石塔が数多く造立されるようになった。西山光照寺だけでなく、上城戸の外の盛源寺をはじめとして一乗谷とその周辺に石仏・石塔が多数見られるのは、こうした盛舜上人とその弟子達の活動によるものである。

朝倉氏滅亡後の慶長16年(1611)に北庄(福井市内)に移ったという。しかし、一乗谷とまったく関係を絶ってしまったのではなく、大正年間の頃まで庵が残っていた。発掘調査でもこの庵の跡が確認された。

安波賀の地は、朝倉氏が一乗谷地区と関係を持った最初の地区である。それは貞治6年(1366)斯波高経が幕府に背いて南朝方と結んだとき、朝倉高景は幕府方について斯波氏誅伐に功があり、坂井郡・足羽郡内7カ所の地頭職が与えられた。そのひとつに一条家領字坂庄がある。字坂庄は、現在の美山町朝寺から福井市東南部にかけての地域に広がっており、その中にも一乗谷も含まれる。朝倉高景の子茂景・久景・弼景の兄弟はこの頃安波賀に館を構えたと伝えられるが、この事件がきっかけとなったのであろう。

安波賀から安波賀中島にかけても、山裾側に朝倉宗滴の屋敷跡や西山光照寺のように武家屋敷や寺院跡が伝えられ、足羽川寄りには鏡屋の小字名があるように、町屋があったものと思われる。県道「鯖江・美山線」の拉幅工事では町屋らしき小区画の地割りが見つかったが、調査区の幅が2mに満たないためその性格については十分明らかにすることはできなかった。

遺 構 (PL2～6, 第4～5図)

西山光照寺跡は、本堂など主要な建物があつたと考えられる平坦面約4,000㎡と、その北側の石仏が並ぶ参道と考えられる部分、さらに山側の数段平坦面の墓地からなる。今回の調査は平坦面のうち、南東側半分を対象とした。石仏のあるところと石塔を積み上げてあるところは、それらの整備計画を立案してから調査することとして、対象から外した。

全体に大きく削り平さされていて、寺院の構成を掴むことはできなかった。以下山裾側から順に検出した遺構ごとに説明する。なお説明の用いる方向については実際の方角とは40°ずれているが、山側を西、足羽川側を東とする。

S B 4406 大正時代まで存在した西山光照寺の庵の跡である。奥行き6m×開口4m分の礎石が残っているが、庵跡に伴う構や石列から間口は8m近くあったと考えられ、もう少し規模が大きかったようである。

S X 4427 礎石建物S B 4406に伴う石列で石を立てた状態になっており、この石列がS B 4406の段となっていたと考えられる。しかし、礎石建物とは方向が少し異なって東に5°程振れている。

S D 4411 礎石建物S B 4406の裏にある南北方向の石組の溝で、南端で東に直角に折れ曲がる。溝幅が0.4mとやや広い割に深さは0.2mと浅い。礎石建物S B 4406とは方向がややずれており、また東に折れ曲がった溝の延長上にS B 4406の礎石列があり、レベル的には両者は同じである。溝石は立てて使っており、城戸ノ内で見られた石の使い方は異なっていることから、S B 4406と直接関連する構ではないが、朝倉時代の溝とも考えられない。おそらく、庵も何度か建て直しのあっただろうから、前の庵の時の溝であろう。

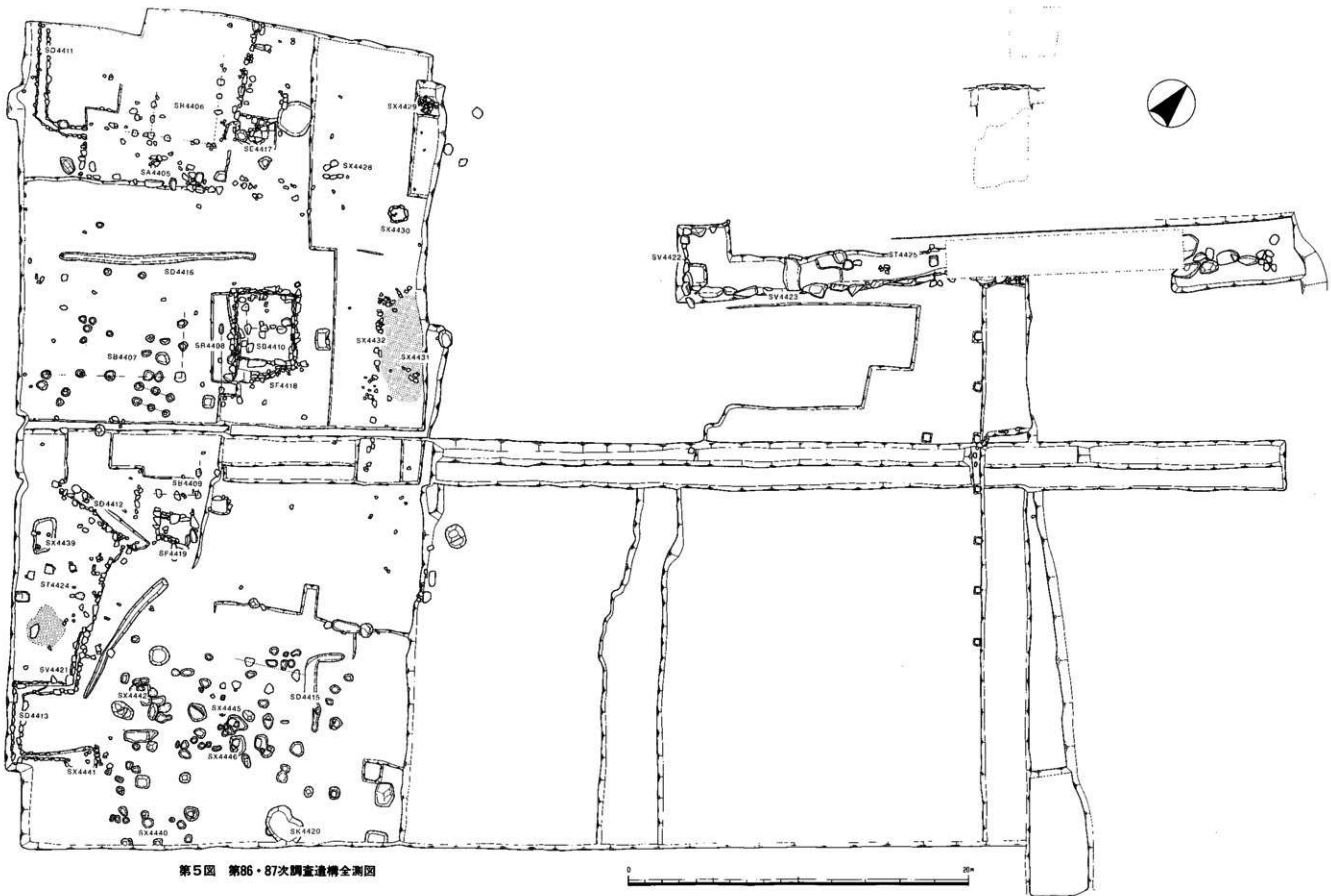
S E 4417 庵の東に位置する石積みの井戸である。発掘調査以前から開いており、大正時代まで使われていたのであろう。直径が小さく0.7mしかないが、下へ行くほど大きくなっている。井戸の天端は笏谷石を敷いており、この下に朝倉時代の天端があると思われる。

S A 4405 礎石建物S B 4406の南にある高まりで、南側は石列を並べてある。幅0.3m、長さ8.5mある。東の端でS X 4407とつながる。しかし、南側の石列は子細に見ると高まり側に面が揃っているようで、これも朝倉時代の何らかの遺構を利用したものと思われる。

S B 4407 山裾近くで検出した礎石建物である。見つかった礎石は2石、礎石抜き取り穴が4基だけなので、建物の規模は不明である。しかし、使用されている礎石は直径0.4m前後と大きく、また礎石を据える穴に小砂利で固めてあったことからかなりしっかりした建物だったと推定される。

この建物の東側で礎石で2石見つっている。S B 4408と平行になるが礎石の大きさは小さく、またレベル的にも一段低くてS B 4407とは2.5mほど離れるためその落線の礎石とは考えられない。

礎石建物S B 4407の南脇に越前焼の甕(S X 4437)が据えてあった。この礎石建物S B 4407の南脇に6個の土甕がある。深さは約0.3mあり、3個が2列1mの間をおいて平行に並んでいる。方向は礎石建物とは25°ほど南に振れている。



第5図 第86・87次調査遺構全測図

S B4408 礎石建物S B4407の南の位置する礎石建物で、礎石4石が見つかった。規模は不明。S B4407と建物の方向は同じであるが、礎の規模が小さいことから、別の建物であろう。

S D4416 礎石建物S Bの北に位置しそれと平行する溝ある。この溝は地山に直接掘り込まれた状態で、幅は0.5m深さは0.1mある。浅いところから元は石組の溝だったが、石が抜き取られてしまったものと思われる。この溝より北は、S B4406の下も含めて、表土を除去し遺構を検出した段階で部分的に地山の岩盤が露出した。

S F4418 発掘区のほぼ中央に位置し、礎石建物S B4407の東にある石組遺構である。規模は、4m×3.5m、深さ1.5mを測る。中は礎石が投げ込まれたような状態で埋まっていた。石と石の間は焼土が詰まっていたが、部分的には隙間がみられたところもあった。4周石垣になっていたが、南だけ石垣のないところがあり、ここに下に下りる階段がついていたと思われる。底には礎石が5石見付き、この礎石や4周の壁は焼けていた。したがって、この石組の遺構は地下倉庫と考えられる。この石組遺構からは青磁を中心に多数の遺物が出土したが、それらは投げ込まれた礎石の間などから細かく割れていたことから、これらの遺物はこの地下倉庫に收藏されていたのではなく、朝倉氏滅亡後礎石といっしょに火事場整理として投げ込まれたものとする。

S F4419 礎石建物S B4407の南に位置する石組遺構で、1.7m×1.0m、深さ0.5mを測る。中は灰で埋まっていた。東側の石組は大きめの石1石をたててあるのに対して西側の石組は、小さい石を積み上げてある。

S D4412 建物と墓地S X4424を区画する溝状の遺構である。かなり溝石が乱れ、片側の石は失われている。

S K4439 溝状遺構S D4412の南に位置する浅い土壌である。内部は黒い炭で埋まっていた。

S X4424 笏谷石を用いた墓地と考えられる遺構が4基、自然石を用いたのが1基が見つかった。なお、内部の調査は行っていない。来年度まとめて調査の予定。

S D4413 鍵の手状に折れ曲がる石組の溝である。一部は石垣状になっている。東の端は広がっており、水を使う施設があったように思われる。北端も行き止まりとなっている。

S K4426~4449は土壌である。この地区は全体としては焼土で覆われていた。焼土で埋まっているものや、深いもの浅いもの等があり、いくつかはその性格が分かれるようである。

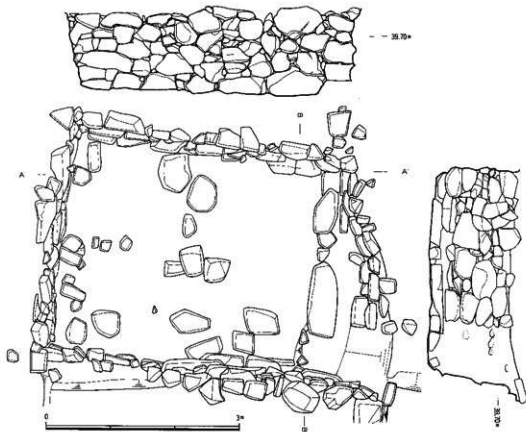
S X4432 SF4418の東に位置する石列で、10m確認された。その東には一部砂利敷が認められ、通路となっていたようである。なおこの石列は一時期古く、石列より東は一段低くなっていた。また、これより東は元の畑地自体が40cmほど低くなっていて、遺構面は全

く認められなかった。

S V1422.23 西山光照寺参道に並ぶ南側の石仏列に沿ってトレンチをいれた。その結果この石仏列の背後は石列となっていたが、これは巨石を使用した石垣であることがわかった。石垣は西端で直角に北側に折れる。また、石仏列近くでは現在立っている石仏列より0.7m低い位置で石仏の基礎部が、立っていた。さらに、その西から火葬骨を埋めたピットが3基(S X4425)ならんでいるのが確認された。おそらく曲物のような容器に入っていたのであろう。

石仏の背後にあたる部分にトレンチをいれて遺構の有無を確認したが、全くその形跡は認められず、2m近くをいっきの盛り土で造成していたことが確認された。なおその下からは古墳時代前期の土師質皿が発見された。

西山光照寺の寺院と伝えられる範囲の平地部東半分について調査したが、全体に削平が著しく、寺院の建物などの配置は不明というほかない。また、2m近い整地層が一気に行なわれた時期についても、あるいは、石塔・石仏の造立が盛んになりはじめた15世紀末から16世紀のはじめ頃であろう。なお、出土した遺物もこのことに矛盾しない。(岩田 隆)



第6図 石積施設 S F4418

遺物(第7~9図・PL6~8)

本年度の発掘調査は86~87次調査として西山光照寺跡についておこなったことは前章までに述べてきたとおりである。本章においては86~87次調査のうち特に遺物の質、量ともに優れていた86次調査において検出されたSF4418出土遺物についてのみ報告することとする。しかし、表1に示した出土遺物組成表については86~87次調査の全ての遺物について示している。今回の発掘調査で得られた出土遺物の総点数は18,170点であり、調査面積約2,400㎡の平米あたりの密度は7.6点/㎡となり、これは本遺跡の中でも割合として低い密度を示すものである。このように今回の調査により得られた出土遺物の少なさは、遺構の遺存状態と連動するものと考えられ、後世の整地等により遺物が移動しているもの想定される。

		破片数	%
前	壁	2,610	
		3,816	
城	鉢	361	
		352	
		170	
		16	
		7,325	40
		4,813	
土	皿	1	
		8	
		3	
4,825	27		
瀬	鉢	151	
		9	
		331	
		32	
		1	
550	3		
日	鉢	16	
		76	
		6	
		101	
202	1		
本	鉢	3	
		2	
		4	
		2	
		27	
		44	0.2
		20	
9			
18			
47	0.3		
陶	壺	46	
		46	0.3
器	壺	1	
		23	
24	0.1		
土	壺	12	
		5	
17	0.1		
瓦	壺	96	
		96	0.5
13,176	73		

		破片数	%
青	磁	83	
		63	
		194	
		60	
		17	
		11	
		18	
		1	
		20	
		467	2.6
中	白	109	
		353	
		6	
		4	
		4	
476	2.6		
製	陶	83	
		303	
		15	
		5	
		2	
		3	
411	2.3		
染	付	281	
		11	
281	1.5		
褐	磁	11	
		11	
1,844	10.1		
割	陶	132	
		14	
		20	
		1	
167	0.9		
タ	ベ	9	
		22	
31	0.1		
15,020	83		

		破片数	%
金	属	17	
		833	
		11	
		1	
		6	
		58	
927	5.1		
石	製	175	
		434	
		103	
		3	
		22	
		73	
		38	
		232	
		3	
		8	
		10	
		19	
		10	
		3	
438			
1,571	8.6		
近	世	351	
		248	
599	3.2		
そ	の	33	
		1	
		3	
		1	
		1	
		10	
49	0.2		
18,170	100		

表1 第86~87次出土遺物組成表

S F 4418出土遺物

遺物は火事場整理に伴う廃棄品を一括処理したものと考えられ、遺構内全体より満遍なく出土しており、遺物自体も小破片化したり高火度の熱を受けたため、器面全体に焼き膨れを生じたものが多数含まれている。

瀬戸・美濃焼 (1)復元口径9.5cmを測る蓋であり、天井部外面には鉄釉を施し内面は露胎としている。(2)は口径16.5cm・器高3.5cmを測る。灰釉皿であり底部外面には3ヶ所の目跡を残している。(3)は復元口径11.5cm・器高2.6cm、(4)は口径10.8cm・器高2.8cmを測る鉄釉皿である。(5)は口径5.5cm・器高2cmを測る鉄釉環であるが、体部外面下半を露胎としている。(6)は口径12.2cm・器高7cm、(7)は復元口径12cm・器高6.6cm、(8)は口径8.5cm・器高4.4cmを各々測る鉄釉碗であり、体部外面下半を露胎としている。(9)は口径および器高ともに5.7cmを測る鉄釉壺であり、体部外面には全面にカキ目調整しており、底部外面には回転糸切り痕を有する。(10)は復元口径9.8cmを測る鉄釉壺の体部上半である。(11)は鉄釉壺の下半であり、底部外面には回転糸切り痕を有する。(12)は復元口径5.3cmを測る鉄釉壺の頸部であり、外面には耳を有している。(13)は復元口径26.1cm・器高21.8cmを測る鉄釉桶である。(14)は復元口径11.4cm・器高43cmを測る壺である。肩部には耳の剥離痕が認められ、体部上半にはやや厚く鉄釉が施釉され、体部下半には刷毛による施釉がおこなわれている。(15)は復元口径14.1cm・器高30.6cmを測る灰釉壺である。肩部には耳の装着されていた痕跡が認められる。

越前焼 (16)は壺であり、お歯黒壺として使用されていたものである。肩部には双耳を有し、体部下半は縦方向のヘラ削り調整する。(17)は復元口径16cm・器高28.1cmを測る壺である。肩部と体部の境には1条の凸帯を有し、体部内面下半には縦方向のナデ調整する。

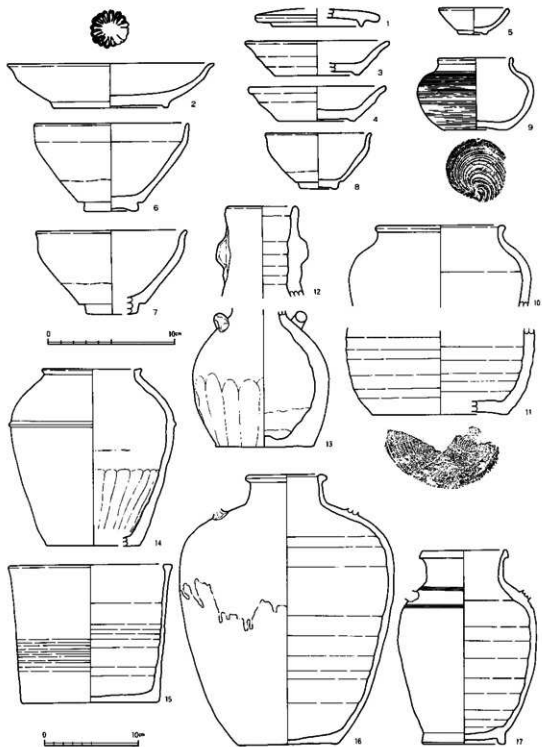
中国製陶磁器 (18~33)は青磁である。(18)は復元口径18.9cm・器高8.5cmを測る碗であり、高台部から底部内面にかけては露胎としている。体部外面には鎡蓮弁文を有する。(19)は復元口径12.4cmを測る碗である。体部外面には鎡蓮弁文を有する。(20~22)は無文の碗であり、高台部から底部外面にかけては露胎とする。(20)は口径14cm・器高4.7cm、(21)は口径15.8cm・器高6.6cm、(22)は口径11.7cm・器高7.2cmを各々測る。(23)は復元口径12.1cm・器高2.8cmを測る皿であり、体部内面には線書の草花文を有する。高台部から底部外面にかけては露胎としている。(24)は口径7cm・器高1.7cmを測る皿であり、底部外面を露胎とする。(25)は復元口径16.7cm・器高4cmを測る無文の皿である。(26)は口径8.4cm・器高5cmを測る香炉であり、体部外面には算木文状の凸帯を有する。また、3足の脚を有する。(27)は復元口径12.5cmを測る香炉であり、体部外面には算木文状の凸帯を有する。(28)は復元口径8cm・器高3.7cmを測る香炉であり、3足の脚を有する。(29)は口径7.5cm・器高5.5cmを

測る香炉であり、底部外面には高台を有する。㉑は復元口径7cmを測る長頸瓶の頸部であり、外面には双耳を有する。㉒は、花瓶であり、高台部内面を除き全面施釉している。㉓は復元口径26.9cm・器高5.9cmを測る盤であり、体部内面には蓮弁文を有する。㉔は酒会壺である。体部下半には蓮弁文を有し、青磁釉は厚く施されている。(34~37)は白磁である。㉕は口径13.9cm・器高7cmを測る碗である。高台部接地面のみを露胎としている。

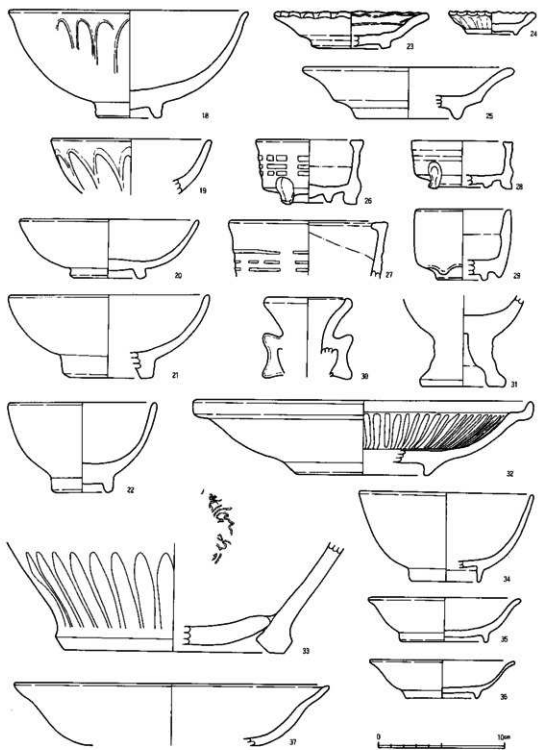
(35~36)は端反りの皿である。㉖は口径11.9cm・器高3.5cmを測り、㉗は復元口径11.5cm・器高3cmを各々測る。高台部接地面のみを露胎としている。㉘は復元口径24.9cmを測る皿である。釉調は他の白磁と異なり、やや灰色を呈している。(38~46)は染付であり、分類は小野正敏「15~16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No2 1982年日本貿易陶磁研究会に拠った。㉙は復元口径13.9cm・器高6.2cmを測る碗C群である。㉚は復元口径11.2cm・器高5.5cmを測る碗B群である。(40~43)は皿B群であり、㉛は口径9.6cm・器高2.2cm、㉜は口径9.6cm・器高2.1cm、㉝は口径9.4cm・器高2.3cm、㉞は口径14.7cm・器高3.5cmを各々測る。(44~45)は「碁筋底」の皿C群であり、㉟は復元口径10.3cm・器高2.7cm、㊱は復元口径9.8cm・器高2.5cmを各々測る。㊲は復元口径20cm・器高2.9cmを測る皿F群である。㊳は口径19.4cm・器高4.5cmを測る皿E群である。㊴は瑠璃釉碗であり、口径13.2cm・器高5.6cmを測る。内外面共に施釉するが、底部外面のみ露胎としている。

朝鮮製陶磁器 (49~50)は蕎麦茶碗であり、㊵は口径17.4cm・器高6.5cmを測り、㊶は復元口径16.4cm・器高5.7cmを測る。

(水村 伸行)



第7図 第86次S F4418出土遺物



第8図 第86次S F 4418出土遺物



第9图 第86次SF4418出土遗物



▲下城戸通路
(北から)

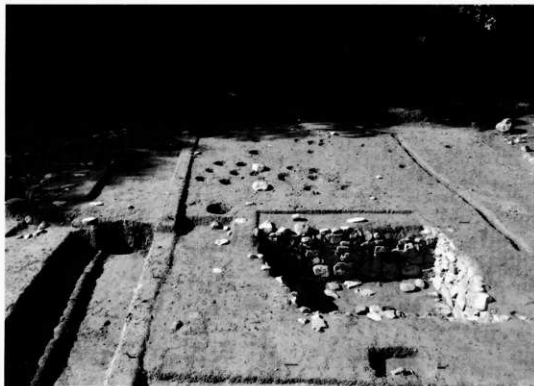
◀下城戸通路
(南から)



第86・87次調査地区全景（東から）



第86次調査地区土坑群



S F 4418・建物 S B 4407 (北から)



石組構 S D 4413・墓地 S T 4424 (北から)



◀石組施設
S F 4418

▼石組施設
S F 4419





◀石垣 S V4423

▼礎石建物 S B4406





13



4



5



6



8

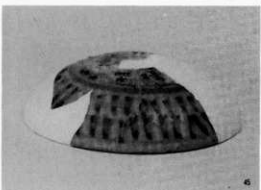
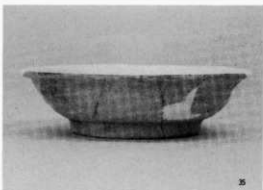
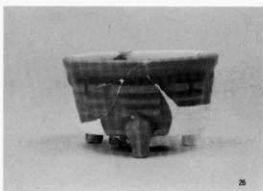
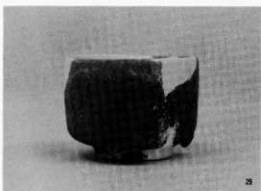
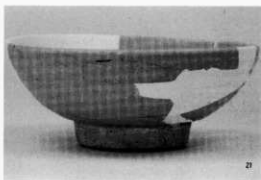
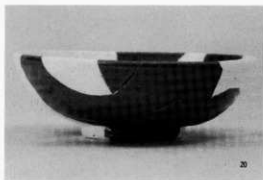


17

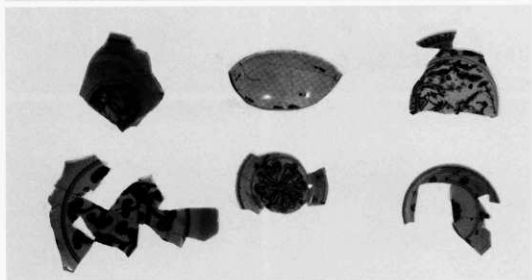
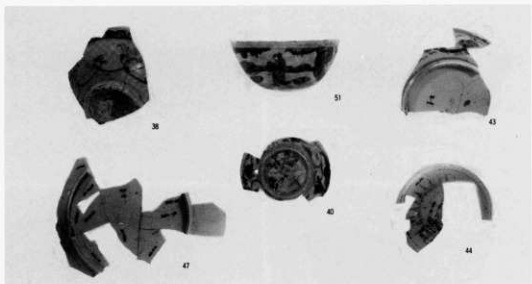


16

越前焼壺13 瀬戸・美濃焼鉄釉皿 4 鉄釉坏 5 鉄釉碗6-8 灰釉壺17 鉄釉壺16



青磁碗20-22 香炉26-29 白磁碗34 皿35 染付皿45



染付碗38・51 皿40・43・44・47 瑠璃釉碗48 朝鮮製陶磁器蕎麥茶碗49

特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡

平成6年度発掘調査環境整備事業概要冊

発行年月日 平成7年3月31日

編集・発行 釜井昭立一乗谷朝倉氏遺跡資料館©

印刷 河和田屋印刷株式会社